



**Data** 2024-25

監督・脚本・編集：イ・ソルヒ  
 出演：キム・ソヒョン/ヤン・ジェ  
 ソン/シン・ヨンスク/ウォ  
 ン・ミウオン/アン・ソヨ

## 👁️👁️ みどころ

韓国のソウルで開催された、ドジャース VS パドレスの大リーグ開幕戦は世界的注目を集めたが、そのウラで大谷翔平の通訳、水谷一平氏の違法賭博疑惑が驚きの中で報じられた。なぜ、彼はそんな“負のスパイラル”に陥ったの？

本作のキャッチフレーズにされている「半地下はまだマシ」を見れば、本作の狙いは一目瞭然。しかし、韓国の名門映画学校を卒業した新進女性監督がなぜそんなテーマに挑戦したの？

ビニールハウス暮らしをしながら訪問看護師として働いている、韓国映画賞で主演女優賞4冠をゲットした女優が演じる主人公の魂は善。しかるに、なぜそれがドミノ倒しのように、不幸の連鎖の中に・・・？

本作ラストの救いようのない情景をしっかりと胸に刻み込みたい。



### ■□■韓国でも、若手新人女性監督の才能に注目！■□■

2024年3月20日、韓国のソウルで大リーグの開幕戦が開催され、ドジャースの大谷翔平 VS パドレスのダルビッシュ有の「夢の対決」が実現した。日本ではあまりに大きすぎる大谷翔平報道に対して、「大谷ハラメント」という批判もあるそうだが、彼の活躍は、将棋界の藤井聡太八冠とともに、若手の活躍の二枚看板になっている。日本でも中国でもそして韓国でも、2024年の今“若者たちの閉塞感”が強いが、中国では“第8世代監督”の躍進が続いている中、韓国でも本作を監督・脚本・編集した1994年生まれ若手女性監督イ・ソルヒに注目！

本作は、第27回釜山映画祭でCGV賞、WATCHA賞、オーロラメディア賞の3冠をはじめ、韓国主要映画賞主演女優賞他6冠をゲットしたようだ。

### ■□■タイトルの意味は？「半地下はまだマシ」とは？■□■

日本で「ビニールハウス」と聞けば、誰でも野菜や果物を作っているそれを想像するが、本作のキャッチフレーズは、「半地下はまだマシ」だから、そんなタイトルの意味は一体ナニ？中国では、恒大産業の事実上の倒産に代表される“不動産バブルの崩壊”が大問題になっているが、極端な競争社会で貧富の差の大きい韓国では、不動産格差はかつての日本以上に、また今の中国以上に深刻らしい。

「半地下はまだマシ」のキャッチフレーズは、もちろん、カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞したポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（19年）（『シネマ 46』14頁）を意識したものだが、韓国では本当にビニールハウスの中で生活している人間がいるの？それについては、パンフレットに収録されている、①伊東順子氏の『『ビニールハウス』で暮らす人々』、②西森路代氏の「韓国映画と『救いのなさ』」、③稲垣貴俊氏の『韓国格差映画』の刷新と継承 新鋭監督イ・ソルヒと『ビニールハウス』」、④角田光代氏の「たましいの持つ善性」、という4本のレビューが必読！また、イ・ソルヒ監督の詳しいインタビューも必読だ！

韓国の冬は日本より寒いが、ビニールハウス内の冷氣対策は？暖房は？逆に、暑い夏の日の日除けは？さらに、昨今の日本の住宅で、機能の高さが競わされている、バス・トイレ等の水回りは？本作を見れば、日本の住宅の暮らしが如何に豊かか、ビニールハウスに代表される韓国の下層階級の生活が如何に劣悪か、がよくわかるはずだ。

## ■□■韓国主演女優賞で4冠ゲットの女優に注目！■□■

『逃げた女』（20年）（『シネマ 49』341頁）等に主演している韓国女優キム・ミニは、ホン・サンス監督のミュージズとして有名。また、『帰れない二人（江湖儿女/Ash Is Purest White）』（18年）（『シネマ 45』273頁）等に主演している中国人女優・趙濤（チャオ・タオ）は、第6世代監督の賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督のミュージズとして有名だ。ところが、中国映画も韓国映画もたくさん鑑賞していると自負している私は、寡聞にして本作でムンジョン役を熱演し、韓国の映画祭で主演女優賞4冠をゲットした女優キム・ソヒョンを知らなかった。キム・ソヒョンのような有名女優がイ・ソルヒ監督のデビュー作となる本作のようなインディペンデント映画に出演したのは、「まず脚本に魅了されたため」らしい。本作の脚本は、韓国の名門映画学校「韓国映画アカデミー（KAFA）」の映画監督コースを卒業したイ・ソルヒが自らの実体験を踏まえて書いたものだが、貧困・孤独・介護・非行等をキーワードとした今の韓国の社会問題の根の深さは想像を絶するものだ。彼女の生き方ややり方に共感を覚えることはできないが、キム・ソヒョンの熱演ぶりはさすが韓国映画！そして、さすが主演女優賞4冠をゲットしただけ見応え十分だ。

## ■□■本作の人物関係図と本作のストーリーは？■□■

本作の人物相関図は、パンフレットを引用すると次のとおりだ。

## 人物相関図



キム・ソヒョン演じるムンジョンが訪問看護師として通っている家の盲目の元大学教授テガン（ヤン・ジェソン）は温厚な性格だし、その親友である医者ヒソク（チョン・ジョンジュン）もいい人だ。しかし、テガンの妻で、重い認知症を患うファオク（シン・ヨンスク）の“タチの悪さ”は目に余るものがある。しかもムンジョンの母親チュンファ（ウォン・ミウォン）は老衰のため病院に入院していたし、息子のジョンウ（キム・コン）も少年院に収容されていたから大変だ。他方、本作の“負のスパイラル”を進行させていくキーマンは、第1に、時々テガンの元を訪れる“小説家の先生”と呼ばれているギョンイル（ナム・ヨヌ）。このギョンイルは、若い女性スナム（アン・ソヨ）を囲う一方で、時々ムンジョンを“つまみ食い”して肉体関係を持っている男だから、アレレ・・・？こりゃ、いずれ問題を起こしそうだが、そんな状況下でも、グループセラピーでスナムと知り合ったムンジョンは、お人よしにもスナムをビニールハウスに招待する等さまざまな接点を深めていくことに・・・。そんな状況下、“ある日”ムンジョンがテガンの家での“お仕事”に“ある事件”が起きると、ムンジョンは・・・？

## ■負のスパイラルに注目！ここまで行くか！■

2024年3月20・21日に韓国のソウルで開催されたドジャース VS パドレスの大リーグ開幕戦で、大谷翔平、ダルビッシュ有、松井裕樹ら日本人大リーガーがそれぞれ大活躍を見せてくれた。ところが、他方で大谷の通訳として注目されていた水原一平氏の違法賭博疑惑が突然発表されたからビックリ。その送金額は6億7千万円に上っているそうだが、そんな金額に膨れ上がったのは、まさに“負のスパイラル”のせいだろう。本作の予告編では、ビニールハウスで暮らす主人公のムンジョンは訪問看護師をしながら、息子と2人で平穏な生活を過ごしたいと語っていた。ところが本編を観ると、ある日、突発的に起こった“ある事件”をきっかけに、まさにムンジョンの“負のスパイラル”が連続していくことに。そして、それに輪をかけたのが、親切心から目をかけてやったスナムの行状だが、なぜ普通の人間、普通の女性、普通の母親であるはずのムンジョンがそんな“負のスパイラル”に陥らなければならなかったの？

大統領選挙を見ても国政選挙を見ても、韓国は、日本とも台湾とも異質の“極端さ”を示すのが大きな特徴だが、「格差をめぐる負のスパイラル」の進捗性においても、韓国は極端らしい。その結果、本作ラストに訪れる風景は想像を絶するものになるので、それに注目！前記④の角田氏のレビューは、「たましいの持つ善性」をテーマとして解説しているが、いわゆるドミノ倒しのように広がる不幸の連鎖の中で迎える、本作ラストの、救いようのない情景をしっかりと胸に刻み込みたい。

2024（令和6）年3月27日記